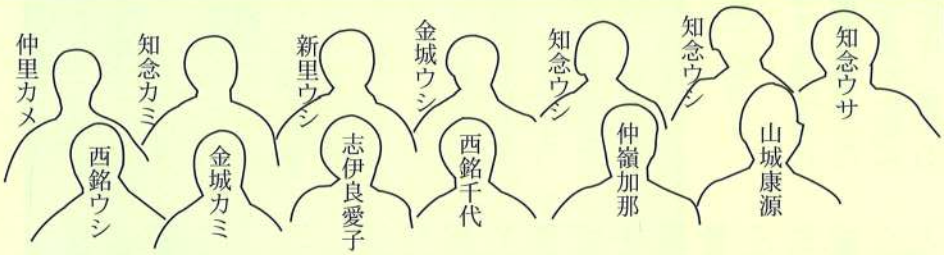
第2号　発行：平成21年3月31日

与那原町史だより

与那原町教育委員会　生涯学習振興課　町史編集室
TEL098−871−9981　FAX098−871−9982　郵送先　〒901−1303 与那原町字与那原712番地



大日本国防婦人会　大里村分会
作成協力：知念善達（板良敷区）

与那原町史編集委員会

●委員長
吉浜　忍
沖縄国際大学教授

●副委員長
真栄平　実
与那原町立綱曳資料館長

●委　員
新垣庸一郎
元高校教諭

●委　員
山内　敏春
元小学校教諭

●委　員
渡名喜興憲
元高校教諭

●事務局（町史編集室）
辺土名　彬、瀬底　雄子、恩河　直美、富川　恵子、吉田　充泰

聞き取り調査
人々の証書①

南洋の戦場から佐世保へ

仲里全孝
【当添区　大正12年生】

志願し、佐世保へ

私は、早く一人前になりたかったので、満一六歳の時に少年電信兵に行くことを希望したが親が許してくれなかった。昭和十六年、一八歳のときに父親の許可を得て志願し、テストを受けた。昭和十七年一九歳で佐世保に行くため那覇港からかぎ丸に乗り、大島経由で鹿児島に渡った。汽車で、佐世保についた私は、九月一日佐世保第二海兵団に入団した。その日に筆記テストがあり、その結果、米山が世話係、私は副世話係をいいつけられた。

入隊した二四〇名は十二教班に分けられ、一個班が二十名ずつで組織され、入団後はすぐには配置につかず、九月からの四カ月間は新兵教育を受けた。私たちが入団するころには速成の必要から新兵教育期間が六カ月からさらに短縮された。新兵教育は厳しく鍛えられ、体の弱い者は次々と倒れていった。

佐世保第２海兵団第13分隊　笛田分隊第10教班
前列右端　仲里全孝氏　　1942（昭和17）年撮影

新兵時代の規則として

校門近くの建物の二階から外出員である班長や事務局員が出入りするのが見えた。訓練中は、脱走兵を防止するために外出員の出入りを見てはならないという決まりがあった。

ある日、私の班の田口が外出員の出入りを見ているところを当番の四教班長に見つかった。田口は午後、四教班長に呼び出された。そのときはもう大変だった。世話係が席をはずしていたので、副世話係の私が四教班長のもとに呼ばれ、言われるままに田口の顎にティクブシ（鉄拳）をふるった。翌日外出先から帰ってきた私の班の教班長が田口の顎の具合を気にして、四教班長との間で話し合いをもった。「仲里、沖縄の空手の達人が殴ったら死ぬこともあるから手加減しなさい」とたしなめられた。

後日、私が外で手旗信号を教えているときに、田口が制裁の腹いせにドスを手に追いかけてくることもあった。私は怖くなり、班長達のいる伍長室に逃げ込んだ。私の話を聞いた班長達はその後田口にお灸をすえている。

南太平洋の軍艦金剛に配属

訓練を終えた私は昭和十八年一月に南方にある軍艦金剛に配属となった。トラック島へはあさま丸で渡り、島に停泊中の金剛に乗るまでには一週間かかった。金剛が旗艦となり、榛名を含めた二隻の戦艦に、巡洋艦クラスが三隻ほど、浅瀬まで行ける海防艦が四隻、駆逐艦や駆潜艇がそのあとに続いた。

金剛では、ひとつの砲台に七名がつき、弾詰めの作業をした。七名の他にも弾詰め作業を手伝う係、運搬する係、弾薬庫で作業する者もいた。第一砲手から第七砲手までがおり、私は第四砲手であった。トラック島では湾の外から艦砲を何発か発射したが、故障したため、湾内にいる第二線に配置された。湾を出ると敵の潜水艦が潜んでいるところはわからなかった。

ナガナガでの空襲

昭和十八年三月、月岡トラジュウが率いる佐世保第五特別陸戦隊に配属され、ニューブリテン島のナガナガで陸戦訓練を受けた。訓練期間中のある夜、アメリカのマーチンという飛行機の空襲を受けた。一発が途中で破裂し、火の粉があがるバラバラ弾に驚いて、私は全速力で逃げた。島のあちこちに爆弾が落ちた。島の酋長の女の子が足を怪我して、木製の担架で運ばれてきた。この女の子は軍医の手当てで助かった。訓練後、ニューギニヤのサラモアの戦闘に参加した。

フインシュハーヘンに撤退

昭和十八年の十月三十日、サラモアでの敗戦により、フインシュハーヘンに向け撤退することになった。サラモアからフインシュハーヘンには山を歩いて行くのだが、南国ニューギニアといっても高い山の中は寒かった。寒さに耐えられず亡くなった人もいた。人間最後は気力だね。

サラモアの奥の山から撤退する途中に

は対岸まで百二十～百三十メートルもある大きな川に椰子の木で仮橋が造られてあった。この橋のところで飛行機から激しい爆撃を受け、榴弾砲の砲弾が凄かった。夕方に橋の前まで来ると橋が爆弾で壊され、渡るところがなくなっていた。それでもかまわずに渡河すると、兵器も重みのあるものばかりを担いでいたので、爆弾の跡などにズズと沈んでしまうこともあった。それでも何とか川を渡りきることができた。

渡った先には森があり、その後ろには掩体壕があった。そこにはガソリンが入ったドラム缶が埋められていた。敵の進攻に備えてガソリン入りのドラム缶を全部川上に二百～三百メートル転がし移動させた。敵を待ち構えていたが、敵はなかなかこない。日が暮れてから敵の艇が現われ、川を渡り始めた。川の真ん中に来るとドラム缶に穴を開けてぼんぼん転がしながら火をつけた。水上は炎におおわれたので、敵はたまらず逃げていった。そして私達はその日のうちにダイハツ（上陸用舟艇）二隻に荷物をいっぱい詰め込み、兵隊も乗れるだけ乗って、一時間半かけてラエに逃げた。

マラリアで苦しむ

ラエには日本軍の飛行場があった。その他にも飛行機を隠す掩体壕や壕がたくさんあった。掩体壕のそばには床の高さが5尺ほどもあるトタン屋があり、そこにはマラリアにかかった六、七名の兵隊がいた。私自身もマラリアにかかり、熱で5尺上の床にもあがれずに床下で休んでいた。近くにある爆弾跡の水溜りで汚れた衣類を洗い、そしてトタン屋に戻ろうとして十五、十六メートルの距離に来たとき、トタン屋めがけて砲弾が着弾した。中にいた七、八名が犠牲になった。それで私は掩体壕に移りそこで寝た。

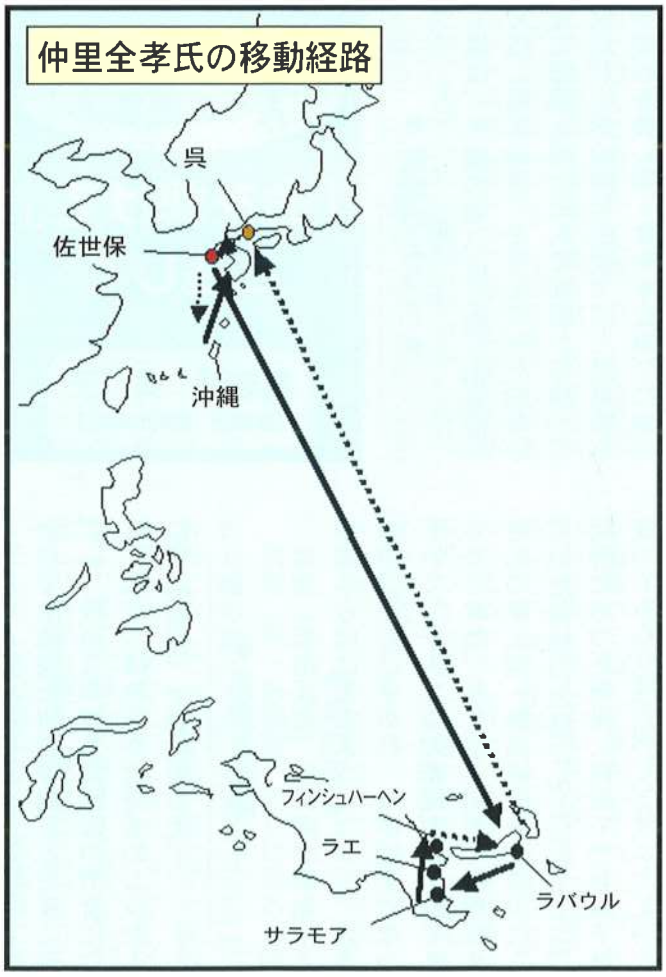
翌日の朝、部隊を探しながら飯も探し、鉄砲の弾も探した。あっちこっち倒れている兵隊のそばには必ず兵器も弾も落ちていた。

三日目の朝、二つ歳上の内間さんがあちこちの壕を探して私に会いに来てくれた。自分たちの部隊は撤退の準備をしているから一緒に行こうとのことであった。また、先任下士官から連絡がきて医務課の倉庫に僕宛の小包があったと聞かされた。それを聞いて私は元気が出た。小包の中には千人針と、砂糖がいっぱい入っていて、千人針は身につけ、「みんなで帰ろう」と砂糖は分けてあげた。このとき本当に自分を助けてくれる神様はいるのだと思った。部隊に復帰するとニューギニアの各地を転々と移動するが、どこをどう歩いたか覚えていない。それでも四十三日間の行軍で、へとへとになりながらフインシュハーヘンに着くことができた。

帰国し療養

翌日の晩、昭和十八年十二月十三日に潜水艦が来て、我々はその船でラバウルに渡った。私はマラリアのため第八海軍病院に一週間入院した。そこからまた病院船で十二月二十日呉（くれ）海軍病院に送られた。三日熱と熱帯熱の混合マラリアで、高熱のため、意識がもうろうとするほど衰弱していた。

昭和十九年一月十七日佐世保病院に転院した。佐世保病院では三日間意識不明の状態が続いたが、看護婦さんがよく面倒をみてくれた。それから軍医の勧めもあり、一月二十一日佐賀県の嬉野（うれしの）海軍病院に転院し、温泉で療養した。二カ月ほど静養したのち、体力も回復したので、昭和十九年三月末佐世保海兵団第二役員分隊に配属された。しかし、まだ完全に回復していないとのことで、従兵班に入ることになった。従兵班での仕事は、士官の世話をするということでした。



聞き取り調査 人々の証言②

「命を繋げて」と残して

具志堅　貞　子
【新島区　昭和5年生】

戦前のようす

私は、六歳の頃六区（現・中島区）で店（桑江商店）を営んでいた伯母の元に母親と妹と三人で那覇から移って来た。小学校四年生までは大里尋常小学校の分校（現・青少年広場）に通ったが、昭和十六年に太平洋戦争が勃発してから与那原国民学校に変わった。学校では勉強と防空壕掘りと交互に過ごし、後から学校も武部隊の宿舎になり、私たちはお寺や大見武のムラヤー（現・公民館）で勉強をした。

学年終了写真・昭和５年生
昭和16年頃、御殿山の敷地内にて。
中央教師は新里トミ先生、
２列目右から２番目は具志堅貞子さん。

兵舎と兵隊

兵舎（浜田兵舎）の兵隊が昭和十八年頃から店に来るようになった。兵舎の中は左右に分かれ、床が段差になっていて、一人ずつの布団が敷かれてあった。また、サイラー川近くの屋比久さんの家（現・新島区）を住まいにしていた将校の大林さんという方とは、兵舎にあった酒保（売店）でお菓子を買ってもらうほど親しくなっていた。

あの頃、石部隊の事務所になっていた泉崎病院の城間医院長の実家（現・中島区）には山原から来る材木を管理している兵隊が十人ほど出入りしていて、時には材木を防空壕までトラックで運ぶ事もあった。

六尺棒と綱

昭和十九年頃になると、夜中に兵隊の死体を運んだ軍艦が入り、火葬に使う骨ガメやお香を買いに来てよく起された。

その年の八月の末、学校からの通達で妹が学童疎開に行く事になった。那覇の港近くの旅館まで妹を見送ったが、

横須賀砲術学校に入校

昭和十九年十二月、横須賀砲術学校のテストを受け、入校した。私は探照灯専修班に組まれ、最初のうちは普通科の勉強をした。横須賀砲術学校の学校長は皇族の三笠宮殿下であった。昭和二十年三月には東京も空襲に見舞われた。探照灯の訓練は夜間に行うのが普通であったが、訓練中は敵機の標的となることもあり、時には二メートル間隔で弾が飛んでくることもあった。

砲術学校では、陸戦の方法などを実戦的なことも教わった。軍部の主目的は即戦闘要員の育成にあったので、実弾による射撃練習も行われた。私は戦地帰りで、実戦経験も豊富だったので、三百メートル向こうの的によく当て、上手なほうであった。

昭和二十年三月に入ると、東京もたびたびB17の攻撃を受けるようになり、横須賀砲術学校も多大な損害を被った。十八、十九日頃には百二十名の生徒が参加して総仕上げの訓練が行われ、その後三月の末、横須賀砲術学校探照灯専修班普通科を終了した。

原爆の衝撃音を聞く

昭和二十年四月、佐世保第二役員分隊に配属された。六月に入って佐世保の市内が数回にわたり夜間攻撃を受け、中心地は焼け野が原となった。敵の本土上陸に備え、陸戦訓練を中心に陣地構築に補充分隊の約五割の兵隊がたずさわっていた。

長崎への原爆投下時は現在の佐世保市三川内の山の中で陣地構築中であった。落ちたときの衝撃は「ゴー」という長い音が佐世保まで聞こえた。瞬間は何が起きたかわからなかった。しばらくは「なんだろう？」とみんなで話した。長崎市は大きな爆弾でやられたということは、宿泊施設に帰る途中聞かされた。翌日佐世保に行くと、長崎から運ばれてきた被爆者を見た。見るに耐え難い様子であった。その後、米軍機から原爆に関する情報ビラがまかれて原子爆弾だと知った。

終戦そして帰村

復員後佐世保のいとこのところに世話になり、昭和二十一年十月八、九日頃、佐世保から駆逐艦に乗り、久場崎（現沖縄市）に着いた。下船するとDDT（害虫駆除剤）をまかれた。そのときは長嶺春康さんや照屋ゼンセイさんも一緒であった。十月十日、当添に帰ってきた。

乗るはずの対馬丸は他の学童が乗船した。その船は敵の魚雷で撃沈された。それにより六尺棒と綱を準備するよう家に通知があった。母親は「そこまでしては行かせない」と、夜中に馬車を借りて妹を連れ戻した。

（※六尺棒と綱の使用目的は不明）

◆十・十空襲で◆

十・十空襲の日は、家の近くの避難壕に隠れていた。すぐに破片や泥が飛んで来て、親川にいた朝鮮人が使っていたシンメー鍋に泥が飛んで来たので、その朝鮮人は「アイゴー、アイゴー」と泣き叫んでいた。近くのハンザークムイ（当時・四区の警察署の裏の池）に爆弾が落ちたということだった。あちらこちらと薬莢が転がっている中を歩いて無事に家に戻ったのは夕方であった。

それから各区（当時・一区から十区）が山の方に防空壕を掘り始め、私たち六区は大見武の池田（現・西原町）近くに掘り、さらに兵隊の壕堀り作業（現・与那原町社会福祉センター）にも駆出され、後に大見武の壕にも兵隊が入るようになった。もう勉強どころではなく、知人から「仕事をした方がいいよ」と言われ、安国寺（首里）に移っていた地方裁判所で電話番の仕事をした。

昭和二十年三月二十三日、学校の卒業式の日であった。朝の七時頃に空襲警報のサイレンが鳴り響くと、すぐに隣近所が大騒ぎとなり、私たちは親戚の家に逃れたが、そこから宮城（現・南風原町）の知人の壕に移動をした。その後、自分たちの壕に避難した。その日は爆弾は落ちなかった。

四月初め頃だったか、「与那原が燃えている」と叫び声を聞き、新島の様子を見る為に急いで大見武の壕から家に向かったが、今の与那原小学校から御殿山のそばのサイラー川周辺は全部炎に包まれていたので家に行けず、また同じ道を通って壕に戻った。

◆南部へ◆

戦火は日ごとに激しくなり、「大見武は危険だから」と母と妹三人で山を登って与那原方面を見ると、港は米軍艦で沖の方まで埋め尽くされていた。

しばらく歩いて池田に下りるとき、肉弾三勇士というのか、色が白く、頬を赤く染めた若い兵隊が日の丸のハチマキを締めて十人ぐらい整列し、隊長らしき人が一本ずつ菊の紋章が入った金鵄のタバコを配り、それに火を点けてあげた。兵隊たちはそのタバコを吸い終わると、そのまま一人乗りの舟（特攻艇）に乗り込んだ。たぶん突撃隊だと思うが、「日本は強い、戦争は必ず勝つ」と私は思っていたので、国の為だから可哀想という気持ちもなく、戦争が怖いものだということもあまり感じず、「やっぱり、大和魂がそんなにも強いんだなぁ」と思いながら見送った。

南風原に下り、道が分からず、他の人に着いて同じ道を行ったり来たりとしながら夜通し歩き通した。その途中に妹がはぐれてしまった。母と探し回り、南風原陸軍病院跡のところまで来たが見つからなかった。私たちは仕方なく後ろ髪を引かれる思いで南部へ歩き出した。

◆炊事兵と◆

その頃球部隊が炊事婦を募集していると知人に聞き、大城（旧・大里村）にある部隊で母親が炊き出しの手伝いをする事になった。大城部落から日本兵が中城湾に向かって野砲を撃ち続けたが、米軍からの艦砲射撃が多くなり、しばらくして米軍の上陸が始まったと聞いた。ここまで部隊と行動を共にして来たが、真境名（旧・大里村）の方からは米兵が攻めて来て、「ここにはいられない」と皆一緒にチリチリバラバラになった。母と炊事の兵隊の今宮さん（大分出身）、炊き出しをしていた仲吉エミ子さん（当時・与原）、津波商店（当時・六区）の津波ヨシ子さんやその義妹と一緒に逃げた。ひたすら歩いていると、国吉（現・糸満市）で一軒の民家を見つけた。そこには足の踏み場もないぐらいたくさんの人が座っていた。翌朝、艦砲射撃で隣に座っていた親子が即死したのを見て、私たちは驚いてその場を立ち去った。

五月末頃、国吉には通信隊の基地（現・パームヒルズゴルフリゾート）があって、ガーラ（湧き水）のそばで休んでいるときに通信隊が通るのを見た。兵隊の中から城間ヒロシさん（当時・六区）を見つけた。私が「母ちゃん、城間のお兄さんだよ」と言うと、「話があったらやって来なさい」との隊長の許しがあり、母と城間のお兄さんが少しだけ言葉を交わした。その後「元気で頑張ってね」と声をかけ別れた。それから昼、夜とさまよい歩いた。途中、死んだ子供を背負った母親を見たが、いつ死ぬかもしれない自分の事で精一杯だったので、声をかけ助ける勇気もなかった。

◆母の死◆

真壁（現・糸満市）辺りに来ると隠れる壕も無かった。六月十五日の朝、木陰で休んでいた母親が破片で大腿部をやられ、夕方に亡くなった。「ああ、私より先に死ぬんだなぁ」と思ったが、悲しむ余裕も無く、涙は出なかった。

そして、私は持っていた手榴弾で皆

と一緒に死のうと考えた。そのとき隣にいた兵隊が、手榴弾を抱えるようにして爆発させて亡くなった。その様子を見て、一個の手榴弾では皆は死ねない、破片で怪我をしても死ねないと諦めて手榴弾を捨て歩き出した。

◆手榴弾不発◆

その後摩文仁の壕に避難したが、ここもアメリカ兵に占領され、迫撃砲により身動きが出来なくなっていた。やがて米兵が夕食で使う食器のガラガラ音が聞こえるほどの近くまで包囲されていた。

翌日、壕の中に手榴弾が投げ込まれた。「どうせ死ぬんだったら、皆一緒に」と、手をつなぎ輪になって死を覚悟したが、いくら待っても爆発しない。「あれ、おかしいね、こっちに確か投げ込まれたと思ったのに」と見ると、それは不発弾であった。そこからすぐに出て、近くの壕に移ると、そこには負傷した防衛隊（沖縄の人）三、四人と、今宮さんがいた。

そして今宮さんが「これで命を繋げて」とサトウキビを渡し、「あんたたちは、まだ死ぬことはない、ここは危険だから早くこの壕から出て行きなさい」と言った。私たちは「一緒に行こう」と声をかけたが、「日本軍人としてそれは出来ない、どうせ捕虜に取られるぐらいなら、ここで死んだほうがいい」と強く言われ、仕方なく私たちだけ手を上げ三人で壕を出た。その後、アメリカ兵の迫撃砲で壕は焼かれてしまった。

私たちが壕から出る時、今宮さんがポケットから出した母親の写真を眺めていた様子を思い出す。真壁で私の母親が死ぬときに、今宮さんに「皆のことをよろしく」と言われて私たちと最後まで一緒にいてくれたことを本当に感謝している。

玉城の収容所から軍作業に向かう人々

中央の後姿の少女－新島区・瀬嵩フミ子さん

◆捕虜生活◆

捕虜となり、伊良波（現・糸満市）部落に連れて行かれた。畑の真中に溢れるほど人が集められたが、怪我をした人だけはテントの中に運ばれた。私たちは畑の中で一夜を過ごしてから、トラックで野嵩（現・宜野湾市）の収容所に連れて行かれたのが六月末頃だったと思う。そこでは玉那覇栄三先生がCPをしておられた。

それから毎日、大山の陸軍病院（基地内）から迎えに来るトラックに乗り、炊事の仕事に就いた。しかしだんだんと親戚が恋しくなり、親戚のいる山原に行きたいと希望をして一人で行く事にした。

古知屋（現・宜野座村）の開墾作業に駆出されたが、竹を幾束か出さないとおにぎりが貰えなかった。一ヶ月経って与那原の人から従兄は嘉陽（現・名護市）にいると知らされ、その人の案内で二日歩いて嘉陽に着き、やっと従兄に会えた。ここも食事が十分に無く、毎日のようにマラリアで亡くなった人が埋葬され、時には一日に三十人も亡くなることがあった。

センダングサ

終戦を迎えてからも、こうしてたくさんの人が亡くなっていた。

配給日の朝は、瀬嵩（現・名護市）の本部まで行き、一週間分の配給品を持って夕方に戻って来た。配給品は缶詰ばかりで野菜はぜんぜん無く、サシグサ（センダングサ）や桑の葉、食べられる青いものは全部食べた。

やがて与那原に戻れる事になったが、新島にはすぐには入れなかった。それで大見武（現・発電所近く）のテントに従兄と入り、私は主に家事をした。

◆妹と再会◆

昭和二十一年頃、真栄原（現・宜野湾市）で看護婦をやっていた親戚から妹が病院に運ばれて来たとの知らせがあった。石川の孤児院で流れ弾が腿に入ったようだ。すぐに妹を迎えて大見武に戻って来ると、私が入る予定だった高校（現・与那原中央病院辺り）に妹を入学させた。

大見武で一年ぐらい過ごしただろうか、新島（当時・三区）に出来た規格屋に入れると聞き、規格屋一軒に四世帯ぐらいで入った。

規格住宅

戦後、新島区に建てられた規格住宅。

聞き取り調査
人々の証言③

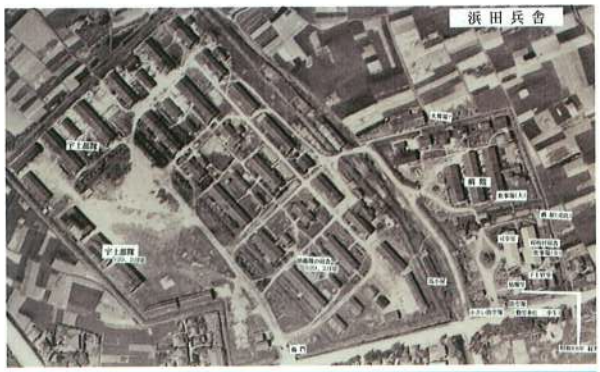
部隊解散・友の死・家族との再会

城間京子（旧姓安谷屋）
【新島区　大正11年生】

筆生として採用

私は、昭和十八年五月一日中城湾要塞司令部西部（現与那原小学校）四一七一部隊（長＝柴田陸軍大佐）経理部要員筆生として採用。当時は、司令部、経理室、病院等があり、司令部と経理室には、堀部隊、鎌田部隊、村上部隊がいた。

私は経理担当で、女性は一人だった。留守宅送金といって、上官の給料の半分を家族に送金する係りだった。私の俸給は戦地手当てがついて八〇円だった。一週間に一回は、タバコ二個、フンドシと日用品等の支給もあった。



中城湾臨時要塞司令部（現在：与那原小学校）
1944（昭和19）年10月10日撮影　資料：沖縄県公文書館

十・十空襲

昭和十九年六月球一八八〇三部隊（長＝廣池文吉軍医中佐）経理部佐藤主計中尉、助手下家軍曹、上村伍長の下に配属。中城湾要塞病院と経理部は開南中学校（陸軍病院）へ移動になった。その日もいつもの通り、汽車で開南中学校へ向かっていた。朝の八時頃、真玉橋近くで汽車が停車。敵機来襲という声で、みな汽車を降り、私は、国場辺りの山の方へ避難した。与那原へは線路沿いの溝に隠れながら帰って来た。与那原へ着く頃には夕方になっていた。

南風原分院へ移動

十・十空襲で、開南中学校は破壊され、部隊は南風原分院（南風原国民学校、現：南風原小学校）へ移動。翌日からは、私も南風原分院へ通うことになった。そこには、与那原で開業医をされていた嵩原安春（外科、県病院部長として召集。戦死）先生がおられた。妹の和子が病弱のためお世話になった医者である。中城湾要塞司令部に勤めていた頃、支給されたタバコを嵩原先生へ持って行ってあげると、とても喜んでくれたことが今でも思い出される。

空襲も日増しに激しくなり、嘉手川軍医中尉から「ここにいては危ないから、早く家に帰りなさい」と言われ、経理部を辞めることにした。

球四一五二部隊配属

祖父以外の家族は、熊本へ疎開することになり、那覇の港へ向かっていたが、港のほうで、何か爆撃があり、見送りで来た祖父はびっくりして、「ナー、マースラー海ヤカー、アギィドゥ マシヤクトゥ」（死ぬんだったら、海より陸で死ぬほうがいいから）と言い、引き返して、そのまま眞境名（大里村）の壕に避難した。

当時、家の隣の国吉家には、球四一五二部隊（独立混成四四旅団重砲兵第七連隊、江口兵舎にいた部隊）の隊長樋口大佐が寝泊りしていて、家にも何度かいらっしゃったことがあった。その部隊も大里に移動しており、私たちが避難している壕へ来て、部隊で経理をしなさいと言われ、私は球四一五二部隊に配属になった。

そこは二階建てのような造りになっていて、隊長と兵隊が入り、経理部は少し離れたシーの下（岩陰）だった。ここで働いていたのは、中城湾要塞司令部でタイピストをしていた儀間千鶴子さん、庶務の平良光子さん、仲泊マサ子さん、カミムラさんだった。

経理部の近くに馬小屋があり、何の用でそこへ行ったのか覚えていないが、朝の十時頃、米空軍の爆弾の直撃を受け、馬の世話をしていた、与那原出身の防衛隊の桑江さんという方が亡くなった。私は爆風で吹き飛ばされ、頭をハンマーで強く叩かれたような感じで、何時間過ぎたか分からないが、目が覚めたときには、負傷患者でいっぱいした宿舎に収容されていた。

ミッちゃん

昭和二十年五月頃部隊は解散。一緒に逃げたマサちゃん（仲泊マサ子）とミッちゃん（平良光子）の三人は、歩いて糸数の壕へたどり着いた。そこでマサちゃんは両親と再会し、私とミッちゃん二人だけになった。

ヒラセ兵長が、経理部にいた浅田カズオ主計中尉から「安谷屋に持って行きなさい」と、預かって来た、貯金通帳、印鑑、万年筆とお金を、唐草模様の風呂敷に包んだカバンを持たされていた。浅田中尉は「お金を持っていれば、どうにかなるから」ということだった。しかし私は、「いつ死ぬか分からないので、持って行くことは出来ません」と言うと、ヒラセ兵長から「必ず持って行きなさい」と言われた。部隊（球四一五二）解散時に、二

個ずつ渡された手榴弾とカバンを肌身離さず、寝るときはカバンを枕代わりにしていた。

当時は、どの辺りか分からなかったのが、後で今の健児之塔の辺りだと聞いた。私は、そこで出会った儀間千鶴子さんの弟さんや、与那嶺亀助さんという方と一緒に岩陰に隠れていた。私とミッちゃんは飯ごうの蓋の裏に雫を溜めて、喉を潤した。ミッちゃんは、しきりに私に聞いた。「死ぬのは怖いね」。と、私は「それは、私も怖いよ」と答えた。避難途中、目（さがん）大尉（中城湾要塞司令部病院長）から鰹節と缶詰二個を頂いたが、どうせ死ぬのだからと思い一度に食べて、二人で寝ていると、突然パーンという音がして、「ミッちゃん」と呼んでも返事がない、傍で寝ていたはずのミッちゃんがいない。ミッちゃんは、持っていた手榴弾で自決したのだ。

◆あの世から自分を迎えに◆

七月の末だったと記憶している。私もミッちゃんの後を追って、死のうと思っていた。しかし持っていた手榴弾は、儀間千鶴子さんの弟と、与那嶺亀助さんに取り上げられ、自決は果たすことはできなかった。

私は、母方の祖父母の下で暮らしていた。祖父母には学校へも行かせてもらい、何不自由なく育ててもらった。これといって恩返しも出来なかったことを詫び、家族の無事をお祈りした。ちょうどそのとき、「ワーワーワー」と騒がしい声が聞こえてきた。今から考えるとおかしな話しだがその時は、あの世から自分を迎えに来た声だと思った。やがて目を開けると、顔の真っ赤になった兵隊に囲まれていた。

私が、学生時代のことだった。初めて見た外国人は、ニコライという靴屋のオランダ人だったと思うが、その人一人だけだった。真っ赤に日焼けした米兵の顔を見たときは、あまりの驚きで、声も出なかった。捕虜となった私たちは、舟艇に乗せられ具志頭へ連れて行かれ、そこから港川へ連れて行かれた。兵隊と民間人に分けられて収容された。そしてトラックに乗せられ当山（玉城村）へ連れて行かれたが、一週間何も食べる物がなく、体はフラフラ状態で、知り合いからおにぎりを貰っても、ご飯は喉を通らず、一度に食べることが出来なかった。

◆妹と再会◆

しばらくして終戦を迎え、解放され、あっちこっちさまよい、百名にたどり着いたが、そこで知り合いの人から、妹の和子は知念方面に行ったと聞き、開南中学校で英語の先生をされていた真玉橋先生と一緒に、先生は娘を、私は妹、和子を探しに行った。そのとき先生から「そんな格好では、米兵に連れて行かれるから」と言われ、顔にナービヌヒング（鍋のすす）を塗り付け、手ぬぐいを腰に下げて行った。

百名の仲村渠樋川から垣花へ上がって行くが、私はどこがどこだか全然分からず、ただ先生の後を付いて歩くだけだった。「ここは何という部落ですか」と聞くと、先生は「屋比久（佐敷町）」とおしゃっていた。喉が渇き水を飲んでいると、与那原の大城そば屋のおばさんに会い「妹の和子はここにいるよ」と言われ、私は、すっかり真玉橋先生のことを忘れ、妹の所へ駆けつけた。妹は爆弾の破片で怪我を負い、足を腫らした状態で座っていた。

ここでは芋掘り作業をして、米二合の配給と聞き、怪我をした妹の世話をしながらの作業は大変だと思い妹を連れて百名へ戻ることにした。朝の九時頃に屋比久を出て、歩いては休みながら、百名に向かったが、百名に着く頃には夕方になっていた。

◆母と再会・帰村◆

私は兵隊と一緒に行動していたので、家族の安否がまったく分からない状況だった。祖父と従弟が、摩文仁で破片でやられ即死した。母たちは亡くなった祖父と従弟を埋葬し、また逃げたということだった。

妹の怪我の具合も良くなり、母たちを探しに行くことにした。収容所からは証明書がなければ出ることが出来ないので、所長をしていた祖母のいとこに頼み、証明書を作ってもらった。金武へ行くトラックに乗ることができた。途中コザ（沖縄市）の収容所で降りた。そこで知り合いから、母たちはカッチンヘーバラ（旧勝連町南風原・現うるま市）にいることを聞き、トラックで勝連まで行き、やっと母たちと再会することがでた。そこに一ヶ月ほどいて、その後、大里の目取真に移動した。その時は昭和二十一年になっていたと思う。ようやく与那原に帰って来ることができた。今の新島辺には、規格屋が建っており、割り当てで入ることができた。

与那原補給地区（現：新島区・中島区辺り）
破壊された与那原。米軍テントが点在している。
中央は現在の与那原交差点。　資料：沖縄公文書館